
過去を共有する

サイルレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去を共有する

【Nコード】

N9797N

【作者名】

サイルレン

【あらすじ】

いつから拗れたのだろうか。過去を共有する二人が、共有しない者のようになっただけだったのは、どうしてだろうか。まだ、二人は同じ想いを抱けているのだろうか。泣きそうな空の下で開くメール画面に飾られた文字は……

（前書き）

一部事実・実体験に基づいて構成されています。

指切り、笑顔。約束、未来。

あの日に私が残していったものはなんだろう。

青い空が目染みる。秋の乾風が過去を呼んできた。

少し冷たい風が屋上を駆け抜けた。少女は首を竦めた。

教室に戻れば、人並みに友達が声をかける。あくまで人並みであり、広く浅くタイプだ。

笹野はイスに座った。

「はあ………」

特に溜息をついても誰もきにしない。それが今時の人間だ。冷めている、それは笹野自身もそうだった。

昔はひつついていた親友がいた。それが今じゃどこか余所余所しい。自分自身が壁をつくっているんだろうな。

ふとたまにそのことについて考えて、泣きなくなる。

「デジャヴ、か」

昔、同じような夢を見た。盗られて、離れて、ついには一人になった。

今の私とそっくりそのままじゃない。

夢の私も、現実の私も、暗くない人に好かれる方ではある。でも、実は猜疑心が強いのだと自覚している、そう笹野は思ってた溜息をついた。反省はしているが、中々変えられないのだ。

「笹野、元気無いじゃん。どしたの？」

「うっん、別に何も。あー、でもややっこい。」

「ややっこい？」

今の親友、有屋あじやは首を傾げた。

「昔は楽しかったのになあ。黒歴史でも、あれが一番楽しかった。」
馬鹿して、一緒に夢みて、笑って。どうして私は失ってしまったん

だろう……

「そりゃややこしいね。トラウマあんでしょ？」

「気付いてたか。」

てへ、ばれちゃった。みたいな表情を浮かべる。

「三人ってというのが苦手でさ。ほんと嫌いなんだよね、昔三人組みで嫌な思いしたから。それ以来空気が重くなっちゃうし、すぐそれに気付いちやうし。」

KYって心底得だと思っわ、なんて情けなく笑った。有屋は笹野の頭をポンと撫でた。

「んで、桐島と曖昧な関係になっちゃたわけだね。あたしが守ってやるって！」

「ありがとう、有屋。桐島だけじゃないよ、何人かいるんだ……」

「桐島は悪魔に盗られたんでしょ？」

戯画化されたような、ニヤリと効果音がつきそうな笑みで言う。笹野は目を丸くした。

「なんで分かるの？」

「見てりや分かるさ。どう考えたって三人の中で何かあるでしょうが。桐島も馬鹿だよな。」

笹野を泣かせるなんてさ。そう有屋が言えば、笹野は「泣いてないわ！」とつつこんだ。

「あたしが怒ってやろうか？」

「大丈夫、ありがとう。自分で聞いてみるよ。」

夕刻、放課後。携帯を片手に持ちつつ、屋上から眺めた。物珍しい景色があるわけでもないが、何となく落ち着く場所だった。

部活は抜けてきている——というより、出たくなかったし、特に愛着があるわけでもない。笹野は自分の飽き性にほとほと呆れていた。

「ちよつと今回は頑張ったんだけどな……」

やっぱりダメだったか、と溜息をついた。同時に涙が零れそうになるのを必死で食い止める。

携帯を開いても、インフォメーションマガジンくらいからしかメールが来ない、そんな友人関係を築きあげてしまっていた。

でも、と思いメール画面を開く。鼻腔を秋の甘い匂いが擦った。

『桐島、この先どうなると思う？私、笑って喜んで、悲しんで落ち込むのに疲れちゃった。』

送信完了。この四文字を見ても後悔なんてしていない。むしろ清々しい気分だ。

笹野はくくつと笑った。

どんな返事が来てもいい。別れでも、謝罪でも、何でも受け入れる。とりあえず彼女の意思を聞きたかった。それからどうするかだ。

まだ笹野の心には哀しみがあつたが、胸の重いつつかえは取れた気がした。

ピロン、と携帯が光る。

メール画面を開けば、桐島からの返事。

『メールじゃ上手く言えない。でもひとつ思い出したのは、

……あの頃の自分たち。

またあんな風になりたいと思ってる。』

私も。

笹野は少し嬉しそうな笑みを零した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9797n/>

過去を共有する

2011年8月29日16時50分発行